芝浦工業大学

理工系の技術と知識を活かして世界と向き合う。この芝浦工業大学ならではの視点でグローバル化に取り組む姿勢が評価され、スーパーグローバル大学（SGU）創成支援事業に採択されました。その構想の取り組みについて村上雅人学長にお話を伺いました。

芝浦工業大学におけるグローバル教育について教えてください。

本学は理工系大学ですが、もともと理工系の学問には、国境がありません。例えば、理工学の基礎となる数学、物理、化学などは万国共通語です。数式は世界中どこへ行っても通じますし、Water が分からなくとも、H_2O と書けば、理工系の素養のある人間ならば、すぐに水のことだと分かります。理工系は、本来、ボーダレスな学問なのです。そして、科学技術にも国境はありません。テレビなどの電化製品は、海外どこの国に行っても使えます。そういう国境のない分野で競争しているので、理工系は、本質的にはすでにグローバル化されているのです。しかし、多くの日本の技術者たちは、国内で作ったモノを海外に売ればよかったという時代に生きてきました。それほどグローバル化を意識せずに、日本の国内にとどまり、一生を過ごしても通用していたのです。

日本にいれば十分に活躍できたわけですね。

本学においても、理工系分野はグローバル競争に晒されているという意識はあったのですが、日本の企業に、日本人学生を就職させることが、大学の大きな使命でした。理工系の基礎科目と、それぞれの分野の専門科目を日本語で教え、日本の社会に送り出すことを使命としていたのです。
一方、私自身は高校時代にアメリカへ行き、その後も海外経験が多かったこともあって、大学や企業も含めて、日本のグローバル対応がとても遅れていると危惧していたのも事実です。

遅れているとはどのような面においてでしょうか？

日本の大学は、日本人の先生が、日本語で日本人学生に講義をして、日本の企業に学生を就職させる。それで十分だったのです。しかしその結果、日本の大学のグローバル化はかなり遅れをとりました。国際会議に行くと、日本人の先生が発表すると、会場から聴衆がいなくなるという場面を何度も見てきました。中国人の研究仲間からは、なんで日本人は英語が下手なのかと聞かれたくらいです。
このままでは日本は立ちいかなくなるという危機感を抱くようになりました。日本の場合は国内に強

い企業がたくさんあり、国際競争ではなくて日本の中での競争に勝てれば企業として成り立っていた時代もありました。しかし、ここ 10 年で、かなり日本の企業のグローバル化が進んだという印象を持っています。

例えば、ある日本の大企業では新卒のうち 8 割を海外採用にシフトし、国内であっても日本の大学を卒業した外国人留学生の採用も視野に入れると宣言しました。これはあきらかに、企業がグローバル競争の中で活躍できる人材を求めているという証拠です。そして大企業だけでなく、中小企業も海外に活路を求めるのが当たり前になってきています。昔の日本の企業では、国内にとどまった人が評価され、海外に赴任させられるのは落ちこぼれのように言われていた時代もありました。しかし、時代はかわり、海外経験のあるひとがどんどん社長になっています。このように、企業では劇的な変化が起きているのです。よって、大学としてもグローバルに活躍できる人材を育成しなくてはならないのです。

大学のグローバル化は喫緊の課題です。なぜなら、大学間競争もグローバル化しているからです。このままでは日本の大学の魅力が失われます。これが、文科省が SGU 事業を立ち上げた背景だと思います。いままでも、文科省は大学に対して、さまざまなグローバル化支援の施策をとってきました。しかし、SGU 事業は一線を画しています。まず、SGU 大学の選定が 2014 年度の一回限りということです。通常の競争的資金は、毎年何校かずつ採択校を増やしていきますが、この事業では、一度決めた採択校に 10 年間支援が続きます。逆に不採択校は、10 年間支援を受けられないということになるのです。これは、いままででは考えられないような大胆な施策です。このため、この事業に採択されなければ、グローバル大学としての将来が危ういという認識を大学として強く持っていました。

本学は東南アジア各国との連携を 20 年前から進めてきました。東南アジア工科系大学連合（Southeast Asian Technical Universities Consortium:SEATUC）を組織し、域内での相互交流などによる教育研究を展開してきたのです。

ある調査によると、ASEAN の若い人たちは世界でもっとも信頼できる国として日本を挙げています。彼らは日本の工業製品に接し、その性能や耐久性に魅了され、日本の工業力に対する尊敬の念があります。これら国々と協力しともに発展することは、日本にとってすばらしいことではないでしょうか。しかも東南アジアは、今後の経済発展が期待されている市場でもあります。これから大きく伸びていく新興国の若い人たちと、日本の学生が一緒に成長できる教育環境が重要と本学は考え、多くの事業を協働で進めてきたのです。このような実績も認められ、SGU 大学として採択されたものだと思っています。

ただし、芝浦工業大学全体がグローバル化に熱心であったかというと、必ずしもイエスとは言えませんでした。一部の人や部署がグローバルに活躍すればいい、そういうスタンスだったのです。しかし SGU 大学構想にあっては、一部の人間だけではなく大学全体がグローバル化対応する必要があるという意識の転換を行いました。

まず SGU 大学として、本学に入学した学生は全員が海外を経験することを目標に掲げています。日本の若者は海外に行きたがらないという話をよく聞きますが、これはせっかく快適な日本で生活をしているのに、なぜ海外に行くのかと、多くの日本人が思っているからなのではないでしょうか。そこで学生には、“海外に行く意義”をきちんと伝える必要があります。

これからますますグローバル化が進む社会にあり、そして理工系というボーダレスな分野で技術を強みに生きていくためには、グローバルな環境においても臆せず活躍できる能力が、とても重要になってきます。大学生という自由に時間が使える時期に、そして若いうちに一度は海外を経験しておくこ

とで、将来の対応が変わってくるはずです。私がいつも言っていることは”Experience is the best teacher”「経験こそ最高の教師である」ということです。海外に行ってみて、はじめて分かることがたくさんあります。ただし、”Go abroad”「海外に行きなさい」と言うだけでは、なかなかその気になりません。それならば、教職員が協力して、学生が海外を経験できるプログラムに参加させようということになったのです。
実際、2週間という短期間、海外に行くだけでも学生はガラッと変わります。インターネットやテレビで知ったつもりになっている海外の文化や習慣ですが、実際その場に行ったら全然違うとびっくりするのです。例えば東南アジアに行った学生たちは、現地の人たちが時間にルーズだということに驚きます。待ち合わせでも、平気で30分遅れてくる。電車やバスが遅れるのも当たり前です。情報として知っていることと自分がその場で体験したことに、大きな違いを感じることになります。そして多くの学生たちは、日本というのはなんて素晴らしい国、なんて便利な国なんだ、ということを再認識するのです。
さらに、自分がいかに日本のことを知らなかったかということにも衝撃を受けて帰国します。海外へ行ったら彼らは日本人の代表と思われますから、日本の文化や歴史、習慣、法制度などについていろいろ聞かれます。しかし、ほとんど答えられないのです。その事実に直面して、自分は日本のことをいかに知らなかったかに気づき、そして、改めて勉強したいと思うようになるのです。
もちろんコミュニケーションにも苦労します。英語がなかなか通じないからです。ここで、英語が苦手と思っている学生に私がいつも言うのは、英語が堪能でなくても意思の疎通はできるということです。特に理工系の学生であれば、冒頭でも紹介したように数学・物理・化学は万国共通ですから、数式や化学記号を紙や黒板に書けばみんなわかります。言葉で通じなくとも、図を描いて見せれば自分のイメージを伝えることができます。このように、筆談や手振り身振りを混ぜることで、意思を相手に伝えることは可能なのです。そして、下手な英語であっても相手と意見交換ができる体験をすると、自信が生まれます。面白いことに、海外から帰国した学生たちは「もっと英語ができれば、もっといろんな話ができて、もっと仲良くなれたのに」と、英語の勉強にも力を入れるようになります。この意識の変化は大きいですね。だからこそ、学生には早いうちに海外に行ってほしいのです。

以前に比べて留学する学生はどれくらい増えていますか？

数年前までは、100名程度だったと思いますが、2015年度は約700名まで増えました。本学に入学したら、4年の間に1回は海外を経験する。それが、目標ですので、かなり近づいてはいます。

数は確実に増えていて、体制は整いつつありますね。

もちろん海外に行くにあたり、安全や安心の確保も大切です。通常10名から20名くらいの規模で海外研修を組んでいますが、教員の引率に加えて必ず職員も同行させます。留学中に体調を崩す学生もいます。そんなときに教員だけの引率では、プログラムがストップしてしまいます。ですから必ず複数の教職員がついていくようにしています。

学生たちが問題なく海外体験ができるようなバックアップ体制づくりにも力を入れてきたんですね。では構想として掲げている『価値共創型教育を特徴とする理工系人材育成モデルの構築と世界の発展への貢献』とはどういうことでしょうか。

簡単に言うと、教員と職員と学生が一体となって、互いに価値を共有してグローバル化に進んでいこうということです。大学の一部の人間や部署だけが進める事業ではなく、全教職員と全学生が参加して進める大学全体のグローバル化という意味です。

学生のやりたいことや意見を取り入れていくということでしょうか？

学生は、教職員から学ぶことはたくさんありますが、学生仲間から学ぶ事も多いです。友人や先輩から海外体験の話を聞き、大変だったけどとても面白かったし、いい経験になったと聞くと、自分も行ってみようと思うのです。
学生の中には、留学なんて自分には関係のない夢の話だと思っている者もたくさんいます。自分には一生関係ない事だと。しかし、よく知っている友だちの海外体験を聞くと、ハードルが低くなります。また、海外に行ったことのない学生は、英語が流暢に話せないと海外に行っても無駄だと思っているのですが、実際に経験すれば身振り手振り、時には記号や公式、図表などを使って何とか意思疎通ができることが分かります。それを自ら経験することで、自信を持ちます。英語がペラペラな人がグローバル人材ではないのです。いろいろな手段で海外の人と積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢を持っている人がグローバル人材なのです。
学生たちに言っているのは、ある程度の英単語を知っていれば言葉は通じるということです。よく考えてみてください。日本人でも、日本語をきちんとした文章として話す人は皆無ではありませんか？単語のやりとりだけで会話は結構通じます。普段の会話とはそういうものです。それがなぜか英語になると、教科書に出てくるようなきちんとした文章を作って話さないと通じないと誤解してしまう。それに気づくためにも海外に行ってほしいですね。仲間から受ける刺激やアドバイスには、大きな意味があるのです。

論文を書くなら文法が必要ですが、海外に行くのならそこまでの語学力はなくても大丈夫ですよ、ということですね。

その通りです。ただし、英語の文章に関しても理工系では特徴があるのです。それは、理工系の英文では one word one meaning が基本ということです。一つの単語に対して一つの意味が決まっています。これが文学であれば、単語の意味にも、同じ文章でも、いろいろな受け取り方ができるようになっており、それが余韻を与えます。しかし理工系の文章では、それをやってはいけないのです。ひとによって文章の意味が異なるのでは、機械が誤作動してしまいます。One sentence one idea でもあるのです。ですから、一度マスターすれば、理工系の英語は論理的かつ一貫性があるため、簡単なのです。

私の研究室に所属する修士の学生の多くは英語の論文を書いています。最初はみんな大変そうですが、一度やり始めると論理的かつ単純明解なので、論文も書きやすいのです。さらに、海外の一流の研究者が書いた論文を読んで「この文章だ！」と思うものに出会ったら、それを見本とすることも推奨しています。私はこれを“英借文”と言っています。それをしながら論文を作成していけばいいのです。一度覚えた基本構文は一生使えるのが理系英語の特徴です。（英借文は捏造ではありません。）

論文としてのルールを覚えれば、英語で論文が書ける。それは学生が想像している英語論文よりも、かなりハードルが下がりますね。

理工系においては、研究者が英語でプレゼンテーションする場合も、このルールに則っています。このため、一度技術用語 (technical term) になれてしまえば、相手の話もわかりやすいし自分の考えも伝えやすいのです。そして、それに気づくと学生たちは英語アレルギーがなくなり、英語の論文も自ら読むようになります。
ところで、海外に行くと海外の友人ができます。これは一生の財産です。本学の海外プログラムには、現地の学生と混成チームを作って与えられた課題を解決するというものがあります。２週間も一緒にいて、互いに意見を交換しながら課題に取り組めば、当然親交も深まります。夜遅くまで、協働で問題に取り組み、ときには徹夜になるときもあるようです。そして、本学の学生が日本に帰る日には、現地の学生全員が空港に見送りにきてくれたりするのです。空港でお互いに「また会おう！」と再会を約束し、別れの涙を流す。これがきっかけになって、向こうの学生が「今度は芝浦工業大学に留学しよう」と決意することも多いのです。海外に友人がいるということは、どんなに心強いことでしょうか。

日本に興味を持つだけでなく、友人に会いに行く気持ちになるんですね。

私が学生の頃は、海外との連絡は電話かエアメールしかありませんでした。しかし、今の学生たちはSNS やメールで簡単に連絡がとれます。なんともうらやましいです。このような通信を通して、英語力もアップします。最近、タイに行った学生が、日本に帰国してからもタイの学生たちと居酒屋でパーティをしたという話を聞きました。どのようにしてパーティをしたのかと聞くと、スカイプで日本とタイを繋いで、テレビ電話状態にしたというのです。このように気軽に交流を続けられる環境がある。いい時代になったと思います。私がアメリカに留学していた頃は、国際電話は１分１万円近くかかりましたし、エアメールは届くまでに２週間かかったものです。

言葉だけでなく、交流をするということでもハードルが低くなっているんですね。では海外経験をしてきた学生たちに対して、どのような教育を展開していくのでしょうか。

もちろん、グローバル人材になることを期待していますが、重要な要素は、多様性を尊重し理解することです。先ほど海外経験が重要という話をしたのは、海外に行ってさまざまな違いを実感し、そこでそれを否定するのではなく、その違いを尊重して相手を理解することがグローバル化には欠かせないからです。
これからの時代は、日本の企業に就職したとしても、いろいろな国の人とチームを組んで活動する機

会が増えてくるはずです。その際に、自分とは違うということで、相手を否定していてはいけないのです。その違いを尊重して、相手を理解することの大切さが分かる人間になってほしいと思います。
1980 年代に世界のボーダレス化が進みました。その際、アメリカなどの先進国の企業が海外進出をしても、なかなかうまく定着できなかったことがあります。その理由は、自分たちの基準を他国に押し付けようとしたからです。他国の風習や、歴史、文化などの違いを無視して、無理矢理先進国基準を押しつけようとして、うまくいかなかったのです。

それは侵略のようにとらえられてしまいますね。

そうですね。もちろん成功した企業もあります。相手の文化を尊重して、そこに溶け込んでいった企業です。例えば、マクドナルドはグローバル化にあたっては上手くやってきました。出店した国の料理や伝統に配慮した商品を取り入れながら事業を展開してきたからです。世界中にマクドナルドがありますが、商品は一律ではなく、それぞれの国の特徴をよくとらえたものが開発されています。このような、他国の事情に配慮できるような多様性の必要性を、学生に経験から学ばせたいと考えています。我々はそれをメタナショナルと呼んでいます。インターナショナルではなくメタナショナルです。これは経済学者が使った言葉ですが、メタというのは一歩上という意味で使われています。単純に自分たちの基準を押し付けるのではなく、相手の国の文化や習慣を理解した上で、自分たちのよさも取り入れて、よりよい（メタな）ものを創造していくという感じでしょうか。
以前、本学の学生が、インターンシップである企業の支援を受けて東南アジアへ行ったとき、その会社の製品が現地ではなかなか売れていないことが分かりました。その国での農作業には、日本で売られている機具が大きすぎて使い勝手がよくないことに気づいたのです。そこでその学生は、「日本で作った機械をそのまま海外に持っていっても需要がありません。現地に合わせた、よりコンパクトな機械を持っていくべきです。」と提案し、企業がそれを受け入れてくれたという事例もあります。

いいものなんだから、どんな環境でも役に立つ、という考えは適していない。

日本で好評でいい製品なのだから、海外でも通用すると日本人は思いがちです。しかも、日本で作っているものをそのまま持っていったほうが楽です。しかし、実際には現地の人たちにとっては使い勝手が悪いので売れないこともあります。現地に行きその環境に溶け込んで、いろいろな経験をして初めて問題に気づくことがあるのです。
多様性を理解するためにも海外に行きなさい、と私が推奨していたら、ある学生がこんな質問をしてきました。「先生、日本人だって多様じゃないですか。わざわざ海外に行かなくても、日本国内にもいろいろな性格や考え方の人がいて、多様性が学べるはずです。違いますか。」と。確かに正論です。そこで、だまされたと思って海外に行って、自分で見てきなさいと諭しました。2 週間ほど海外に行き、帰国した彼の目の色は変わっていました。「先生、わかりました。全然違う！びっくりしました。」と、彼は興奮ぎみに言ってくれました。彼曰く、日本の多様性は白黒の世界だけど、世界の多様性は、青、赤、緑、オレンジと実にカラフルであったと。まさに、”Experience is the best teacher” です。この学生は帰国後、周りの友人たちに「海外に行ってみろよ、全然違うぞ」と、海外経験を勧めるようになりました。このように、学生同士が互いに刺激を与えあうことも、とても大切なことです。

SGU の構想を実現するために実施する授業やカリキュラムはありますか？

今はまず、大学全体を多様性のある環境にするために、留学生を増やしたいと考えています。そのためには、学部においても英語での開講科目を増やす必要があります。
将来的には、すべての研究室に一人は留学生がいる環境にすることを理想としています。今は短期留学を含めれば、多くの研究室に留学生がいるという状況が整いつつあります。これを発展させて常に留学生がいるようにしたいと思っています。研究室に留学生がいるとよいのは、日本人と海外学生の交流が自然と深まり、大学のグローバル化が自然に進んでいくことです。そういう環境がいいですね。

何も決めないほうが、状況に合わせて柔軟に対応できるのかもしれません。

以前私の研究室に留学生が来たとき、学生たちが自主的に、一日に一時間、日本語禁止の時間を作るような対応をしてくれました。ただし、普段騒がしい研究室がその時間帯は静かになったという現象が起きたようですが（笑）。あまり無理をしても長続きしません。学生には、もっと気軽に、日本語でも英語でも、何かを伝えようとすれば相手に通じるということを知ってほしいです。

授業や科目の中では、新しい取り組みはありますか？

いま、大学院では英語による科目履修だけで修了できる体制になっています。学部でも 2017 年を目標に、留学生が英語科目だけで卒業に必要な 124 単位がとれるような体制にしたいと思っています。もちろん英語で講義される科目を日本人学生が履修することも可能です。一度日本語で履修した科目を、英語で再度受講してみるということもできます。単位としてどう認定するかという問題はありますが、一度日本語で学んだ科目なら、内容はわかっています。それを英語で再度受講することで、英語の勉強と知識の復習にもなります。
また、研究室ごとに自主的に SGU に向けての取り組みをしているようです。週に一度は英語でプレゼンテーションを行ったり、英語を学び合うような場を作るなどの工夫をしていると聞きました。さらに職員も英語で毎日挨拶をするなど、日常的に少しでも英語を使う機会を増やすようにしてくれています。例えば、今日は何年の何月何日何曜日ということを毎日英語で言うだけでも雰囲気は変わってきます。英語が特別なものではなくなり、コミュニケーションツールになる。それが理想ですね。

日常的に英語に触れる、そして海外のモノの見かたに触れて多様性を実感する。それが今後どんな国で働くにしてもエンジニアとして活躍するカギになりますね。

本学の卒業生から、社会に出て英語を使わないといけない場面に接し、苦労したことがあるという話をよく聞きます。例えば、日本企業に就職しても、アメリカから新しい機械が導入されたら、すべて英語のマニュアルをもとに機械を動かさないといけなかったり、海外との商売で、日本語のできないネイティブと交渉させられたりします。当然、グローバル社会であり、多くの企業は海外進出しているのですから、英語を使う場面は多いのです。このとき、彼らはしみじみ大学でもっとしっかり英語を勉強しておけばよかったと思ったそうです。理工系学問や工業技術には国境がありません。今後はさらにグローバル化が進みます。技術英語を理解できないといけないのです。

私たちの日常でも、スマートフォンのアプリケーションが英語表記のみという場合もあります。

もちろん、英語だけの説明文では、最初は敷居が高く自分では無理と思ってしまいがちですが、英語は慣れも大切なのです。辞書を片手に取り組んでいれば、必ず対応できるようになります。例えば、海外で開発されたコンピュータソフトを使いたいなら、英語を理解できないといけません。このとき、使いたいという気持ちがあれば意外と対応できるそうなのです。最近はその逆も多く、日本語で開発されたソフトを英語に訳すことも求められています。海外で大人気の日本のアニメの登場人物は、イタリアならイタリア語、タイならタイ語というように、全員現地語で話していますから。

モノの動きが早くなっているからこそ、言葉に怯んでいる場合ではないんですね。他大学のSGU 構想と比較して、芝浦工業大学は実践型であることも特徴的だと思うのですがいかがですか？

本学が 1927 年に設立された背景として、日本の工業立国に貢献できる実践型技術者を育成したいという創立者有元史郎の強い思いがありました。社会に貢献できる知識や技術を身につけた人材を育成することが建学の理念なのです。そして、89 年の歴史のなかで、教師と学生が一体となって、社会に役立つ技術を身につけるという教育を一貫して行ってきたのが芝浦工業大学です。
ただし、21 世紀に活躍するグローバル理工学人材の育成は、大学の閉じられた環境の中だけで行うのは得策ではないと考えています。日本の将来を支える人材を育てるためには、大学も企業も政府機関も、あらゆるところが協力し合って全員参加型の教育を行うことが重要だと思っています。大学が教育を放棄するのかという非難もありますが、そんな小さい話をしているのではありません。
資源のない国である日本は、科学技術立国、工業立国としてやっていくしかないのです。そして、日本の未来を支える人材を育成することが日本としての国是なのです。そのためには、大学だけでなく、いろいろな機関が協力して人材育成にあたることが大切と言っているのです。
このような考えから、教育・研究・開発コンソーシアムである Global Technology Initiative (GTI) の設立を提唱しています。
もちろん、グローバルと言っているのですから、日本の中だけで閉じていてはいけません。本学には、先ほど紹介した SEATUC という東南アジア諸国とのアライアンスがあります。日本の多くの企業も東南アジア各国に注目しています。それらの国の若い人たちの人材育成にも関わっていくことで、イノベーションも生まれます。産学官連携で、日本と東南アジアのグローバル理工学人材を育てていきましょう、というのが GTI 構想なのです。
もちろん日本の大学としては、本学だけではなく、他大学にも参加いただきオールジャパンで展開していくことを考えています。SGU に選ばれた本学が中心となって、他の理工系大学と連携しながら世界に、これから必要な理工学教育を広めていく。それが大切なのです。さまざまな大学と企業が一緒になることで新しい展開が見えてくると思います。さらに JICA（国際協力機構）や JETRO（日本貿易振興機構）など、東南アジアなどを支援してきた人たちも、GTI の考え方に賛同してくれています。彼らは、いろいろな事業を通して、人を育てることの大切さを実感しています。ただし、教育機関ではないので思うように実践できなかったことも多いと聞きます。しかし GTI 構想では、JICA や JETRO と大学が協力して人材育成に取り組んでいけるのです。これが、GTI が支持される理由のひとつです。そこに企業の人たちが参加することで、実践型の課題解決にもチャレンジできます。学生、

企業、政府、NPO などの機関のそれぞれが協力することで、互いに刺激を与えながら、将来は社会に求められる実践的な課題にも取り組むことができるわけです。

SGU を越えた状態でプロジェクトが進んでいるんですね。この文章を読んでいる高校生が芝浦工業大学に入学することで、かなり環境が変わりそうですね。

そうですね。今の高校 1 年生が大学生になるころには、入学してすぐに海外を経験してもらおうと思っています。若いうちに海外を経験するのはとても大切です。本学の多くの先生方も同じ考えです。入学直後のオリエンテーションを海外で行うのもいいですねと言ってくれています。海外で刺激を受けて、意欲をもって大学の勉強を始めるのもいいのではないでしょうか。
もちろん、日本人学生が海外に行くだけでなく、学内にも留学生が増えているでしょう。各国の文化を学内で目にすることで、日本とは異なる世界があることを知り、それを身近に感じることが当たり前になっていく。大学をそのような環境にしていきたいです。

海外の大学との連携などに変化はありますか？

連携できる大学の数は増やしているところですが、基本となるのは SEATUC です。もちろんヨーロッパやアメリカの大学とも連携をしていますが、なぜ東南アジア各国の大学との連携を強化しているかというと、これまで 20 年近く展開してきたプログラムの中で、これら工科系大学の先生に本学の OB がついているからなのです。パートナー大学の優秀な人材を日本に招聘して、本学で博士号を取得するというプログラムを進めてきました。彼ら彼女らの多くは東南アジアの母校に戻り、そこで大学の先生になっています。すでに 30 名近くいます。
彼らは本学の卒業生でもあり、出身大学の先生でもあるのです。そして、そういう人たちが本学との連携を積極的に行ってくれているのです。彼らにとって本学の学生は、自分たちの後輩でもあるわけですから、親身になっていろいろなことに対応してくれています。まさに、彼らは本学の財産です。芝浦工業大学のファンであって、本学に対する愛があります。

卒業生が各国にいるからこそ実現できることがたくさんあるんですね。

もちろん本学の卒業生だけでなく、東南アジアから日本に来て、日本の大学を卒業した人たちが現地に戻って大学の先生になり、今では学長レベルになっている人もいます。彼らは日本ファンであり、日本との交流に積極的です。
海外から留学生を招聘するプログラムにはお金がかかります。そして、なぜ海外の学生を優遇するのかという反対意見も強かったのです。その反対を押し切って、本学のグローバル化を進めてきた先駆者となる先生方がいました。その先輩方のおかげで今日の芝浦工業大学があり、海外の大学との強い連携ができているのです。本当に頭が下がります。
このように教育というのは、常に長期的な視野で考えていかなければなりません。いま、それを実感しています。教育は人をつくり、国をつくります。国を滅ぼすには、その国の教育をダメにすればいいと言われるくらいです。いろいろ問題もありますが、日本の教育は世界に対して誇れるものを持っていると私は思っています。だからこそ、その教育を受けた海外の日本ファンが多いのです。その素

晴らしさを学生にも実感してほしいです。

これから新しく取り組むことはありますか？

学内の国際性を高めるために、教職員のグローバル化に取り組んでいます。海外からの教員も増やしていきたいですし、留学経験のない教員には海外留学を勧めています。さらに、SEATUC の連携のなかで、本学で博士号を取得し、海外の大学教員となっている卒業生を連携教員に任命し、本学にある期間滞在して、学生を英語で指導したり、英語で授業を行うような体制づくりにも着手しました。

高校生へのメッセージをお願いします。

日本という資源を持たざる国が、これまでのような世界的地位を維持するには、科学技術立国しかありません。そして、「ひと」こそが日本の資源なのです。日本の強みである工業技術を支える若い人たちが必要です。教育は国家百年の計であり、それをどこかで怠ると、これからの日本は衰退していきます。そして、日本を支える若いひとたちを育成し、世に送り出すことが大学の重要な使命です。高校生のみなさんには、日本の将来は自分たちの肩にかかっているという自覚を持ってほしいと思います。さらに、今までは日本国内のことだけを考えていればよかったのですが、これからは世界と共に協調し、成長していくという意識がなければグローバル社会の中では活躍できません。常に世界に目を向け、世界と協調するグローバルマインドをもった人を目指してください。

インタビューに答えていただいたた方

■**村上雅人**
芝浦工業大学
工学部教授・学長

東京大学工学系大学院博士課程修了。新日本製鉄株式会社第一技術研究所研究員、超電導工学研究所主任研究員、超電導工学研究所第七研究室長、名古屋大学客員教授、岩手大学客員教授、東京商船大学客員教授を経て、2003 年より芝浦工業大学に赴任。芝浦工業大学工学部材料工学科教授、同大大学院工学研究科長、芝浦工業大学副学長を経て、現職。関東工学教育協会常務理事、日本数学検定協会評議員なども務める。